

# 北神塾

## 第1講「国家の物語 ―なぜ政治を志したのか―」①

2014. 5. 9 (金)

皆さん、こんばんは。「北神塾」という形でやらせていただきまして、お忙しい中こんなにたくさんの方に参加をいただきまして、本当にありがとうございます。私も入ってびっくりしましてね。5～6人くらいでお茶を飲みながらやるのかなと思っていましたところ、こんなに皆さんに熱心に来ていただいたので、あらためて気合いを入れなあかなと思っております。

これは「塾」ということですが、学問的なことではなく、私の経験の中でどういう政治を目指しているのか、または、経済政策や社会保障、あるいは外交、安全保障の問題とか、こういった時事的な問題にも触れていきます。

選挙の時の演説会とかでしゃべっても、せいぜい10分～15分。公約なんか見てもね、スローガンを集めたようなもので、他の候補とあんまり変わらないとかですね。あるいは逆に誤解を招いてしまって、「北神は右翼違うか」とか、そういうことを言われたりね。そういうことがあったので、こうやって、ゆっくり、じっくり時間を取って、お話しすることは非常に大事かなと思っております。

残念ながら、今はテレビの時代。こんなにテレビで、ワイドショーとかで政治家が出て喋ることは、非常に民主的でいいことじゃないかと思われているかもしれませんが、日本ほど、こんなに政治家がいろんなテレビ番組に…下手するとお笑い番組にまで出てね、語るというのは先進国では日本くらいだと思い

ます。アジアの国だって、無いと思います。それはいい面ももちろんあります。親しみを持てるという部分でね。ただ非常に、面白おかしく政策や政治が語られるようになったり、あるいは、カッコいい、勇ましいことを言えば拍手喝采されるとかね。じゃあ実際に現実で政策としてやってみたら、国にとって危ないことになるとかですね、そういったこともあります。

何でも「スローガン政治」になっちゃうんですね。反省を込めて言いますと、民主党もただ「政権交代」と言っているような印象を与えた。それで何となく、それでいいことがあるのかなという期待を持たせてしまったとかですね。あるいは「コンクリートから人に」とかね。これも…決していい加減に言っているつもりは無いんですよ。その背景には、国の予算があまりにも無駄な道路とかに使われているから、少子高齢化の時代にはそういった予算を減らして、むしろ医療とか年金とか、あるいは少子化ですから子育て支援とか、こういった所に向けるべきだと。これを分かりやすく簡単に言うと「コンクリートから人へ」という言葉になるんです。これが例えば建設業界の方からするとね、「何だ、俺達の仕事を全部否定するのか」と。そんなことはもちろん無くてね、必要な道路、公共事業っていうのはたくさんあります。例えば、京都なんかは、共産党府政が非常に長く続きましたので、だいぶ社会資本整備が遅れています。こういった失われた時間を取り返すためにも、私も一生懸命…例えば千代原口の立体交差点や縦貫道の整備も、私が現職の時代に相当早く進めたりしました。亀岡では423号線という道路の整備についても、やってるんですね。だから、スローガンでは何でも分かりやすく言わないといけないので、微妙な所、詳しい所を語ることが、この「塾」の重要な趣旨だと思っております。

あと、もう一点だけ前置きですが、「国家観」。この国家観というのが政治家

として非常に重要だと思っているんですが、この国家観について、選挙の時の演説会とか、あるいは公約とかで語る機会が無い。多分ほとんどの有権者にしてみたら、そんな話は自分の生活に直接関係無いと思われてしまいます。ただ今日は、初回として、やっぱり「国家」とは何か。日本の「国家」とは何か。そして日本の「国家」というのは、これまで長い、二千年くらいの歴史がありますから、その中で何を目指してきて、今後何を指すのかということについてお話をしたいと思っています。

政治家と言うのは、いろんな動機でやっている人がいます。私も2期8年間やってきました。その前は大蔵省という役所で12年間仕事をしていますが、これも当然、いろんな政治家たちと交流するんですね。だから、まあ、いろんな政治家と接してきました。多分…野心家が一番多いのかな。野心家っていうのは、何か自分の心の中で、欠落している所が…例えば子供時代に親の愛情を受けられなかったとかね。あるいは非常に貧乏な生活の中で皆に差別をされたり。そういった人達が、「何くそ」という気持ちで、「自分という存在を皆に認めさせたい」とか「自分のお母さんに認めさせたい」といった所に動機がある場合が多いです。有名な政治家で言えば田中角栄とかね。あの人は、意外にも子供時代はどもりでね。非常に内向的な性格。そして、非常に貧しい、新潟の雪国で育つてね。でもそういう中で、苦勞してお百姓さんをしたお母さんの背中を見て育つて、自分の存在をお母さんにも認めさせたい。「俺はすごい男なんだ」と。こういう動機を持った人たちも非常に多い。あるいは、何となくね、職業的に、名誉職的に政治をやっている人もいます。いろんな人がいます。中には、例えば京都で言えば山井和則さん。この人なんかは、洛南高校で「君達は社会の雑巾になれ」「皆のためにボロボロになって働け」と言われた所から、

福祉とか、お年寄りで本当に困っている人とかのために福祉政策の仕事がしたいとかね。こういう、個別の政策を実現したいという志で政治家になる人もいます。

私の場合は、もちろんいろいろありますけれども、愛情を受けずに育ったとか、そんなことも無いし、ひもじい思いをしたわけでも無い。ですから、そんなに野心とかは無い方だと思います。もっとあった方がいいかもしれないくらいですね。私の場合は、日本という「国家」というものがしゃんとしてもらいたいという思いが強かった。政治家になったのも、そういう国家意識が非常に強かった所から入ったんです。その前に大蔵省という役所に入ったのも、役人になりたいといった気持ちはあんまり無かったんですが、やはり、国のための仕事をしたいという思いでずっとやってきました。

何でそんなに「国家」にこだわるのか。私は、ずっとアメリカに18年間くらい住んでいましたが、いろんな世界の国の人やいろんな民族の人とも交流しますから、自分の祖国を強く意識せざるを得なかった。逆に、この日本ほど「国家」を語りたがらない、あるいは「国家」を意識しない、あるいは、「国家」はむしろ邪魔で、「自分達国民を抑えつけるものや」と思っている国は無いですね。そのぐらい、日本というのは、国家というものを蔑ろにしてきていると痛感しています。

私は日本で生まれて、9ヶ月の時にアメリカのロサンゼルスに親父の仕事で行って来ました。ですから、平日は現地校に通って、もちろんアメリカ人の子供達と、ずっと遊んだり勉強したりして来ました。アメリカには、当然いろんな人種がいます。ずっとアメリカで育った…これも大体元々移民ですけどね、何世代もアメリカにいる人もいます。メキシコから逃げてきてね、アメリカに

違法で住み着いている人もいます。あるいは、中学生の時なんかは、ポーランドから共産主義を逃れて来た貴族のお嬢さんとかもいましたね。そういった人達がクラスメイトでした。当然アジア人もたくさんいました。そういう中で自然と、国家、民族、文化といったものを、子供心にですけど、非常に敏感に感じ取ってきました。ですから、簡単に言えば、日本にずっと住んでいて、周りが皆大体日本人だと、「日本人」という意識もそんなに強くしませんが、向こうにいと、否が応でも「お前は日本人だ」ということを言われます。言葉の端々に、そういったものを痛感させられるという経験をしてきたんですね。

レジュメに沿って話しますと、当時、ベトナム戦争が終わった後の時代でした。ボートピープルという、ベトナムの難民ですね。祖国がぼろぼろなので、それこそぼろぼろの船に乗って南シナ海からずっと日本に來たり、あるいはさらに太平洋を渡ってアメリカに來たりしましたね。本当に、恐ろしい思いをしながら、海を渡ってきてアメリカに來た人たちが、友達にもいました。10人くらい兄弟がいるんですよ。私の友達なんかは、おそらく栄養のある食事をしてこなかったもので、非常に身体が細くて小さくてね。まあ、いじめられるわけですよ、アメリカ人に。今はアメリカもだいぶ変わったと思いますが、オバマさんみたいな黒人の大統領が生まれましたから。私がいた頃なんかは、40年以上前ですから、やっぱり第二次世界大戦の記憶というのもまだ新しかった。私の友達のお父さんが真珠湾の攻撃で足をなくしたとか、私自身は何もしていないんだけど、恨まれたりね。そういう時代でした。アメリカ人には、日本人もベトナム人も中国人も区別はつかないわけですよ。皆同じ、黄色人種のアジア人やと。自分たちよりも劣等な人種でね。そういう気持ちがある人たちが多かったですから、差別されたりしました。私なんかは体が大きい方でしたから、

いじめられずに、逆にやっつけたり、そのベトナム人の友達を助けたりね。そういうことで、そのベトナム出身の子と非常に仲良くなりました。

私なんかは、もう1歳の時からアメリカにいて、家の中ではもちろん日本語でしゃべりますが、友達とはずっと英語でしゃべっていました。小学校1年生からずっと現地の学校に通っていますから、普通に勉強もやりましたけど、その子はベトナムから来て、英語からやらないといけないんですね。ところが、ものの見事に、半年くらいで、優秀な成績を収めるようになる。英語も、発音は訛りがあっても、難しい語彙も覚えている。中学生なのに、徹夜で勉強したりしているんですね。私は、普通に学校の勉強をしますが、後はアメリカ的な生活でね、草アメフトとか、草野球をやったりね。モータークロスの自転車を乗りまわしたり、遊んでばかりいたんです。

ですから、少し不思議に思って、彼に聞いたんですね。「何でお前はそんなに異常に勉強するんだ」と訊いたら、彼は中学生なのにこういうことを言うんですよ。「お前ら日本人は恵まれている」と。「お前たち日本人は、今はアメリカにいるけれども、いざという時は祖国に戻れる。その祖国は立派な国で、十分就職の機会もあるし、仕事も出来る。社会も安定している。世界の中でも国の地位が上がって行って、尊敬されている。だから、お前ら日本人は、そんなに一生懸命英語の勉強なんかしなくてもいいかもしれない。でも私達ベトナム人というのは、もう（当時は）帰れる祖国が無い」と。「今帰っても内戦でぼろぼろだし、平穏な、安定した社会というものも無い。就職も何も無い」と。

「自分達はもうアメリカで暮らすことしか出来ない。アメリカで仕事をする  
ことしか出来ない。ところが、北神君が見ての通り、ベトナム人なんかはアメ

リカでは皆に馬鹿にされているだけだ」と。「だからこそ、人一倍に頑張らないことには、とてもこのアメリカでは勝負をしていけない」と。こういう趣旨のことを言うんですね。私もその時は当然政治なんか興味無かったですし、国家のことなんかも考えていなかったのですが、私も「そうなんか」とストンと落ちるものがありました。「自分の祖国がしっかりしているということは、こういうことなのか」と。ですから、レジュメの2つ目の所にありますように、特に海外にいるとね、自分では国家なんか関係無いといくら思っている、国家は必ず付きまってくるんです。アメリカで、いくら「私は日本でたまたま生まれただけで、たまたま日本人の血が流れているだけで、別に日本という国家なんかとは関係が無い」と言ってもね、向こうの人からすれば「いやいや、お前は日本人だ」と、こういう風になるわけですよ。そして、これは、私個人に限った経験だけじゃないと思っているんです。

これは、今この時点で、日本人が国家として経験していることと同じなんです。例えば、北朝鮮の拉致問題。外国が土足で我が国に上がりこんで、人を平気で拉致している。また、北朝鮮は、大量破壊兵器を持っていて、時々ミサイルを飛ばしてくる。それはやっぱり、北朝鮮という国と日本という国とを意識せざるを得ない状況になってきている。中国も、尖閣諸島、今や沖縄までも自分達のものやと主張していますが、実際に半ば軍艦のような船が尖閣諸島の周りをうろうろしている。これは、今日本がよく右傾化しているとか軍国主義化しているとかいう話もございしますが、私が冷静に中立に見ても、日本が中国に何かを仕掛けてるんじゃないでなくて、戦後今まで経験したことの無い、本当に隣の、近所の国がものすごく力を持ってきて、その力を表現しているんですね。まあ、ある意味では当然のことなんです。力を持ってきたらそれを表現した

くなりますしね。体があまりにも大きくなれば、ちょっと動いてもぶつかるんです。

国力が短期的に増大する国が、他の国の邪魔になるということは、ある意味では自然なことなんです。今までそんな国というのはロシアか米国か、そのくらいしか無かったんですね。でもこれらは感覚的には遠い国で、あまり直接自分達には関係無いと。もっと言えば、冷戦時代なんかはずっとアメリカに守られてましたから。冷戦構造の中で、西側陣営、東側陣営ということで、日本というのは基本的には基地を提供し、ある程度お金を出して、それだけでアメリカが日本を守ってくれた。だからあんまり他国の脅威を意識する必要は無かったんですね。ところが冷戦が終わって、アメリカからも、日本もちゃんと一人前の国として「自分のことは自分でやってくれ」という風になってきた。それでさっきも言ったように、中国とか北朝鮮とか、こういったややこしい国がどんどん力をつけてきた。

こうして、私が子供時代に経験した国家と国家の利害の対立まで行かなくても、緊張感を戦後日本も経験し始めて、非常に国家意識が強くなっているということだと思います。ただ、感情的にね、単純率直に「日本は素晴らしい国だ」、「日本は何でも自己を主張したらいい」と言うのは、えらい間違いを犯すことになります。戦前もこの間違いを犯してね。そういう風になっちゃうと、国民が全員犠牲になってしまうと思いますので、ここは冷静に考えないといけない。しかし、やはり、国家意識が芽生えること自体は、健全なことです。どんなに否定しても、現実には、国際社会の中では依然として国家が単位です。TPPの経済交渉でさえ国家単位でやってますし、文化交流も、もちろん民間の文化交流



もありますけれども、やっぱり大きな話となると国家が単位になる。こうした単位として、国に対して愛情を持って、責任を持っていくということはむしろ健全なことです。

レジュメの3つ目のところに、「平成3年の湾岸戦争」とあります。これは私が日本に戻ってきて、大学時代に、当時の日本人の国家意識の無さにびっくりした、一番大きな事例ですね。湾岸戦争というのは、ブッシュ大統領のお父さんの方が先頭に立った戦争ですね。イラクのフセイン大統領がクウェートを一方的に侵略して、そこに居座ってしまったと。占領しちゃったんですね。当然、イラクの行為は国際法違反です。そういうことで、お父さんのブッシュ大統領が、アメリカ一国だけじゃなくて、イギリスとか日本とかいろんな国に声をかけて、こんな国や軍事侵略を許したら、いざ自分達や他国が侵略されることにもつながりかねない。他に悪いことを考えている国が、「フセインが侵略しても、国際社会はこれを黙認した。じゃあ俺も隣の国を侵略しても、許される可能性があるな」と考えてしまうかもしれない。こういう間違っただ信号を発信してしまうということで、ブッシュさんのお父さんがいろんな国と連携して、「フセインがいついつまでにクウェートから撤退しなければ国際連合軍でイラクを攻撃しますよ」と宣言しました。

その時に私が驚いたのは、日本のテレビで、外交とか防衛の専門家らしき人達が出てきたり、評論家とか役人とか政治家が出てきてね、まずこう言うんですね。「ブッシュ大統領はこんなこと言ってるけど、今の時代にさすがに武力で物事を解決するということはある得ないよ」と。だから「ブッシュは、はったりで脅してるだけだ」というのが、ほとんどの人が、99%がそういうこと

をテレビで言ってたんですね。今から考えると皆さん不思議に思うかもしれないけど、当時は冷戦が終わったところでね、もう平和な時代が到来するんだといった風潮だった。武力で何かを解決するんだとか、よもやアメリカみたいな文明の先進国がね、そんな野蛮なことをするはずがない、というのが当時の雰囲気だったんですね。私からしてみたら、そりゃアメリカの大統領が「やる」って言っているんだから、絶対にやると思っていて、友達とよく議論したりしていましたが、皆「そんなことはあり得ない。あれははったりでフセインを脅しているだけだ」ということだったんですが、案の定フセインは攻撃をされましたね。

びっくりしたのはまず、アメリカの大統領が言うことがはったりだと思っていたこと。これは明らかに「平和ボケ」ですね。もっと言えば、国家というものをものすごく軽んじている表れだと私は捉えたんですね。2つ目に驚いたことは、実際、米国をはじめ連合軍がイラクを攻撃し始めたら、日本の識者や評論家の人達が何て言ったか。「確かにフセインも悪い。勝手にクエートを侵略して。でもそれを武力で解決するアメリカも悪い」と。「どっちもどっちやねえ」と。こういう議論が、これもまた99%くらいメディアを占めましたね。日本の社会の身内の議論だったら、これはよく分かる。大岡越前の裁きじゃないけど。「まあまあ、どっちも反省せなあかん」とかね。こういう発想なんですけど、これはね、国際社会においては、極めて無責任な、ほとんど道徳観念の無い発言ですね。つまり実際に国が侵略され、そこで無辜の民が殺されている時に、それを部外者の国が、「殺したフセインも悪いけど、そのフセインを武力で懲らしめるアメリカも悪いで」。こうした立場は、クエートの人に見てみたらね、「一体こいつは何考えとんねん」と。

レジュメに書いてあるように、当事者意識が無いわけですね。自分達は、遠

く離れた丘の上から優越感を持って、「お前らまたこんな野蛮なことをしているけど、どっちも悪い」という風に聞こえちゃうんですよ。これはクェートだけじゃなくてアメリカなど命をかけている国もそう感じるでしょうね。私も当時は、「よくそんなこと言えるな」と思いました。じゃあ例えば、「日本が北朝鮮に侵略されて、同じことを言われたらどう思うんやろうなあ」と。例えば、北朝鮮が攻めてきてね、アメリカとか他の国が助けに来て、北朝鮮を攻めた。そして他の、例えばヨーロッパの国がね、「まあ北朝鮮も悪いけど、日本も拉致問題でがたがた喧嘩を売っていたしね、どっちもどっちやねえ」と。こういうことを言われるということですね。ですから、こういうことを意識せずに語ってしまったということは本当に「平和ボケ」というか、私の今日の言葉で言えば、国家というものがどういうものなのかということ、あんまり意識をしていなかったのかと思います。

この平成3年の湾岸戦争の経験で、私は政治に行きたい、国の仕事をしたいなと思立ちました。それまではね、こんな顔してますけど、文学青年やったんですよ。フランスの詩とかを暗誦したりしてね。そういう風流人ぶった感じでね。自分でも詩を書いたりしていたんですが、この辺で、自分も国家のためにやっぱり何かやりたいことがあるなと思いました。自分も貢献できることがあるかと違うかと。そういう国家意識とか、外国での経験がありますのでね。そういうところから政治の世界に入ったということです。こうした時に、前原誠司さんが、当時、左京区の府議会議員の選挙に立候補しててね。あの当時は、国会議員ですら「外交は票にならん」ということで外交の話をしていなかったのを、前原さんは府議会議員の選挙でなんか外交の話しとるんですよ。まあ、前原さんっていうのはやっぱりそういう意味で、時代を先取ってね。今はもう

猫も杓子も外交の問題語ったりしますが、あの当時は誰も興味も無かったしね。でも前原さんは府議会議員の選挙で、シンガポールがどうかという話をされていました。私は非常にそれに感銘を受けて、ボランティアで選挙のお手伝いをやりました。まあ、そのおかげで留年しちゃったんですけどね。選挙にかまけちゃって。

それで1年留年しちゃったんで。すぐ議員にはなれないので、大蔵省で国の予算を勉強して、予算を通じて外交安全保障の勉強も出来るし、医療年金の勉強も、国政のいろんな分野の勉強も出来るということで大蔵省に入りました。それで、今はそこを辞めて政治に入った、ということです。

よく政治家でね、私は「国家よりも国民を大事にしたい」と。こういうことを言う人いますね。これは自民党でもいますし、民主党でもいますしね。これは多分皆さん聞いていたら、「それはそうや」と思うでしょう。「国家」よりも「国民」やと。「我々のことを思うのが当たり前や」と思われるかもしれませんが、私は論理的にこの表現はおかしいと思います。国家と国民というのは一体なんですよ。多分国家よりも国民が大事だっていうのは、「国家」と言うと、何か役人や政府のこととか、あるいは政治家のことだと思われるんでしょうね。あるいは国家の体裁とか。国際会議で総理大臣が皆で写真撮る時に真中に立ちたいとかね。そういう見栄の話とか、そういう風に受け取られちゃうと思うんですね。そんなことよりも、我々国民の生活を大切にしてほしいと。そういう意味だと受け取られているんですが、私はそもそも、国家と国民というのは分けることが出来ないと考えます。

日本というのは、島国で日本海と太平洋に守られている国ですから、放っておいても国家というのが何となく自然に存在してきたんですね。これが皆さん、朝鮮半島、中国、あるいはヨーロッパ大陸だったらね、日々国境線が変わるわけですよ。日本みたいに、呑気に、「国家なんて関係無い」って言ってたら、すぐ自分の領土がどんどん狭まっちゃう。下手すると、国民が虐殺されたりね。いろんなひどい目に遭う。だから、大陸の人達というのは、そういった意味では国家意識というものが、ものすごく強烈にあります。国家がしっかりしてないと、国民もダメになるという意識があるんですよ。

でも日本は、国内では戦国時代などお互いに対立していましたが、こうした外国からの脅威の感覚が歴史上ほとんど無いんですよ。まあ、最近で言えば、先の大戦ではアメリカが来て占領されたり、その前は、黒船に脅迫されたとか、ロシアが幕末の時にサハリンの方を荒らしたということがありました。それより前は、13世紀ですかね。もうはるか昔になって、元寇という侵略を体験した。その前はほとんど無いんじゃないですかね。従って、のほほんと、もっと言えばお互いの足を引っ張り合っているけども、外国に攻められるという危機意識はほとんど無い。それはもう我々の遺伝子に組み込まれているんですね。だから、この国家と国家の対立とかが、なかなかピンとこない。で、ピンときた時には過剰反応する。これも大事なことで、過剰反応したら怖い。これはまた追々、時事問題や歴史問題として触れていきますけれども、過剰反応も、これは平和ボケのある意味では一つの副作用なんですよ。平和ボケというのはね、ただのほほんと、ぼーっとしてるだけじゃなくて、何かやられた時に過剰に逆ギレしちゃうと。まあ個人でもそうですよね。喧嘩慣れしてる人は、ちょっと小突いてもそんなに過剰反応せずに、それに応じて抑えたりしますが、喧嘩慣れしてない人は急に凶器を出したり…よく事件になるような話です。

レジュメにありますように、じゃあ「国家」とは何かということですけど、簡単に言えば「秩序」ですね。秩序って何かと言うと、簡単に言えば「安全」とか「安心」、「安定」。日本なんて、世界に冠たる秩序を持った国ですから。皆さんあんまり分からないかもしれませんが、外国に行ったら分かりますよね。友達の家を夜行きたいけれども、ここを歩いたら襲われるかもしれないとかね。あるいは泥棒に入られても警察がなかなか対応してくれないとか。何か水道が壊れても役人に賄賂をあげないと何もしてくれないとか。商売をされている人もそうですね。商売をしても、約束を向こうが破ったのに、向こうが役所に賄賂を出したから自分が損してしまったとか。あるいは、やくざ組織に自分の会社を乗っ取られたけど、何も出来ないとか。これも、「安定性が無い」、もっと言えば、「予測可能性が無い」わけですよ。日々混乱した世界の中で生きざるを得ない。これはたまったもんじゃないですよ。日々の生活から、日々の仕事からね、本当に積み上げて何かを実現するということがなかなか出来ない。

そういう時に国家は何をするかと言うと、国内だけを考えると、警察とか法律とかで取り締まる。こうした警察権や法律がきちっとしていたら、そう簡単に乱暴なことは行なわれぬ、抑止的効果もあります。あるいは、国民に教育をして、社会の常識や道徳や礼節を教えることによって、皆ある程度秩序立った社会というものが出来る。これを保障するのが国家だと思います。例えば一番分かりやすいのは、警察が無い場合を想像すればいいですね。どんな世の中になるか。強いもの勝ちの世の中になりますよね。強いってというのは、腕力ですね。力の無い人は、日々怯えて生きていかないといけない。国家がしっかりしていれば、場合によってはちゃんと裁判で裁いてもらう。逆に、国家が無い

ということは、裁くようなシステムが無くなるわけですから、大変です。

もちろん、国家というのはやはり…後で言いますが、もちろん全ていいわけではないですよ。運用が間違ったら国家も凶器になりますから。ただ、せいぜい「必要悪」くらいには止めないといけないという風に思っています。

また、国家は対外的には、侵略から防衛することがもっとも大事な役割です。まさに直接に国民を守るんです。これも国家が無ければ、それぞれの地域で、例えば、京都だけで守ろうと言っても、向こうは国家全体で攻めてくるわけですからね。規模があまりにも違います。全体の戦略というものも練れないし、広い範囲での資源の配分もままならない。侵略をされたら軍事力にお金を回さないといけないから、例えば、政府が金融機関に指示を出してやるなどの必要が生じますが、こういうことが出来なくなっちゃうわけですね、国家が無ければ。そういった意味では、国家と国民というのは、もっとも原始的な形でも、こういう関係にあって、「国家か国民か？」という選択肢は無い。国家と国民は一体である、と考えています。

これまでは、民主主義以前の国家の話をしてきましたが、次は国民の話になりますが、民主主義においては、国民と国家というのは、さらに、一体化している。国家が無ければ生活が安定しないとか、そういう次元の話じゃなくて、民主主義というのは本当に国家と国民が一体になっているんですね。近代国家というのは、基本的には「一民族一国家」なんですね。これはさっき言ったように、日本の場合は海に守られていて…もちろん他の民族もありますけども、大体同一民族です。そういう中で、何となく一民族一国家は当たり前だと思っていますが、これがお隣の中国とかに行くと、何百ものいろんな民族がある。ウイグ

ル系民族とか、チベット民族とか、モンゴル系民族とか、朝鮮民族とか。でも、近代、この現代の国家というのは、原則は一民族一国家。昔は違ったんですよ。例えばモンゴル帝国とかね。モンゴル帝国なんか、中国も入る、インドも入るしロシアも入る。東欧のハンガリーまでね、ジンギス・カンっていうのは勢力を伸ばしたから。帝国というのは、近代国家と違って、いろんな民族がいても全然問題ないと。

そして、民主主義っていうのは、国民主権がもっとも大事なことです。国民が選挙を通して政治家を選んで、政権を選んで、政治については官僚を動かして、国家を運営するという意味では、まさに国家と国民というのは対立するわけじゃなくて、国民が国家を動かしているという意味では、これはまさに一体です。

この国家と国民の話の最後に申し上げたいのは、特に民主主義の国家では、国民一人一人が自分の国家に帰属意識と愛国心を持たないと成り立たないということです。こういうことを言うと「北神は右翼か」と、「何が愛国心や」となるんです。しかし、説明させていただきたいのが、これはモンテスキューという思想家が、三種類の政府の形を比較するんですね。一つは、王様の制度、王権制です。今で言えば北朝鮮みたいな国です。金（キム）一族がいて、この人たちが仕切っていると。二つ目は、貴族の社会。これは昔のフランスとかで、貴族が牛耳っている国家です。で、3つ目が民主主義の国で、これは国民が仕切っている国です。この3つの政府の形を比較する際、モンテスキューという人はわりと公平で、何も民主主義が一番偉いとか、こんなこと言わないんですよ。わりと平等に、それぞれの制度にはそれぞれいい面があるという見方をします。ただ言えることは、それぞれの国に絶対に必要不可欠な性質、「美德」



がある。この「美德」が無くなったら、その政府は滅びるという風にモンテスキューは言っているんですね。

それは何かと言うと、王様の場合は、「名誉心」。国民に名誉心が無ければ、王制というのは成り立たない。なぜなら、王様のために何か貢献をする…例えば王様が「北神君、この戦争で活躍したから、君に表彰してあげよう」と言うことを心から喜ばないと、皆王様を支えることはなくなります。だから、王権には名誉心というものは必要不可欠だということになります。二つ目の貴族制には何が必要不可欠かと言うと、「節制」ですね。「節」は節度、「制」は制限ということです。「節制」というのは、自分を厳しく律することですね。これも、考えてみれば「なるほど」と合点がいきます。貴族が贅沢を尽くして、どんちゃん騒ぎを毎日やって、いいものを着ているのに、庶民が皆ひもじい思いをしていたら、貴族制も滅びてしまう。

では、3つ目の、民主主義国家に必要な「美德」は何かと言うと、「愛国心」だと言うんですね。何で愛国心かと言うと、国民主権ですから、基本的に国民が選挙を通して国を動かすわけですよ。ということは、その国に対して、「この国を大事にしたい」という思いが無ければ、自分勝手な、いい加減な選択をするとか、あるいは、無関心で選挙に行かないということになってしまう。「この国は私にとってどうでもいい」と考える人が増えると、民主主義というのはやはり滅びてしまうと。

もっと言えば、国家全体よりも、例えば自分の都道府県とかね。「京都さえ良くなればいい」とかね。こうした発想は結構多いんですけど、「北神さん、国のことなんかどうでもええ。京都のためにやってくれ」と。もちろん、京都選出の国会議員としては、京都のためにも働かないといけないんですが、京都

のためだけだとか、あるいは下手すると「右京のためだけや」と、あるいは「亀岡のためだけにやってくれ」とか。もっと極端な意見になると、「町内、学区のためだけ」とか。「北神さん、そんな大きな話はいらん。この学区のためだけにやってくれ」とかね。こういう風になってしまう。これはこれで、もちろん大事なことなんです。大事で、私は決してそんなことはどうでもいいと思っ  
てはいません。いませんが、全国の300の選挙区の皆さんが、そんな発想だけで票を投じたら、投票の結果がどうなってくるかということなんです。自分の地域のことばかりをやるような議員が国会を占めた場合、果たして外交や防衛とかがどうなるのか。年金はどうなるのか。例えば、東日本大震災の時  
には、「東北の人が気の毒や」といった感じ方も、これも愛国心なんです。自分の地域だけよければいいとなったら、「東北の人は関係無い、ここは京都や。京都は京都で上手くやってるんだから、他の地域のこととは関係無い」となる。でも、災害地域を支援する時やボランティアに行く時とか、あるいは瓦礫をこっちに持ってくる時とか、こういう時に愛国心というものが試されるわけ  
ですよ。

そういった意味で、民主主義には「愛国心」が無ければならない。逆に言えば、独裁制とか貴族制なんかには、国民の愛国心はいらないわけですよ。貴族達がよろしくやってくれたらいい。金正恩とその取り巻きとかが勝手にやるだけの話であって、別に国民の愛国心は無くてもいいわけです。金正恩に対する忠誠心だけで国というのが成り立つわけですから。ですが、アメリカとか日本とかヨーロッパの民主主義の国というのは、愛国心が無ければ、国民主権ですから、自分の国のことを考えなくなっちゃうんですね。そういった意味で、私は愛国心というのは不可欠だと思っています。

ただ、愛国心と言ってもね、学校の先生が出て来て、突然「おい君達、愛国心を持たないといかんぞ」と言っても、こんなものは形だけの話です。強制して、「何が何でも国を愛せ」みたいな話になってきてね。それは本質的なものではない。だから私は、愛国心というのはある程度自然に育まれないといけなと思っています。そのためには、「国家の物語」が必要なんです。これはあまり聞き慣れない言葉だと思いますが、国家の物語っていうのはどういうことかと言うと、日本の国が歴史上、何を目指してきたのか、どういう困難に遭って、それをどうやって乗り越えてきて、現在の私達がいるのかという、この「物語」ですね。

アメリカの国家の物語は有名ですね。自由、平等を追求して、アメリカンドリームを実現することですね。どんな人種であれ、どんな出生であれ、どんな経済事情の人であっても、親がどんな人でも、親がいなくても、皆平等に人権を保障され、そしてアメリカンドリームで成功することが出来るという「物語」です。こういう国家の物語を持ってるわけですよ。アメリカ人の愛国心というのは、その「物語」を信じているから、発揮されるわけですよ。お国自慢で「アメリカはえらい」とか、それだけだったら薄っぺらい話です。まともな人だったら、ついていけない。「アメリカというのは本当にいい国だ」と、「いいことを目指してきたし、いいことをやってきた。だから、アメリカの国家に対して自分達は愛情を持っている」というのがアメリカ人じゃないですかね。それは厳密に言えば、嘘ですよ。皆平等でね、「アメリカンドリーム」とかね。皆さんも観光に行くと、単純労働とかは黒人や移民ばかりがやっていることに気づかれると思います。スラム街もあるしね。「何やこれ、アメリカンドリー

ムどころか、日本以上に格差があるなあ。全然話が違うやんか」と思うかもしれないけれども、これは「物語」なんです。物語でいいんですよ。「物語」っていうのは理念ですから。理想ですから。理想というものは、必ずしもすべて現実に当てはまらなくてもいいんです。ここを間違えてはいけません。日本人は真面目ですから、自分達で「日本はこんな国や」と…例えば最近よく出てくるのは、先の大戦は植民地解放戦争だったという「物語」があります。そういう面も確かにあるんですよ、歴史を読むとね。でも多くの方は、「それは名目だけで、実際は悪いこともしている。だからそんな「物語」は受け付けない」ということになる場合が往々にしてある。「植民地解放」の歴史観が適切かどうかは別にして、あまり細かい注文を付けちゃうと「物語」というのは成り立たないんですね。そういったことをまた次回お話したいと思います。

今日はまず、なぜ私が政治を目指して国家というものを意識してきたのか。国家と国民というのは、特に民主主義においては一体であると。皆いい意味での、健全な愛国心を持ったら、国というのはよりよく運営出来る。そして、その愛国心を育むためには、今触れた「国家の物語」というものを皆で共有していかないといけないんだという話をしました。日本の「国家の物語」の内容については、また次回にさせていただきたいと思います。以上です。

〈第1講終了〉